



平成 31 年 3 月 2 日

# 学びの広場

京都市教育委員会 教員養成支援室

## 第5回教育実践特別公開講座

「本市が進める小中一貫教育～京都嵯峨学園の実践に学ぶ～」

講師：学校指導課 手塚 仁 統括首席指導主事  
嵯峨中学校 小滝 俊則 校長先生



今回は、お二方にお越しいただきました。まず、学校指導課の手塚統括から、京都市が進める小中一貫教育についての概要をお話いただきました。京都市が平成 20 年から行っている小中一貫教育の「5つの視点」、平成 27 年から行っている「5つの実践」について、またその成果と課題について教えてくださいました。実施形態については施設一体型、施設併用型、連携型の3つの形態がありますが、引き続き嵯峨中学校の小滝校長先生から、連携型の事例についてお話いただきました。嵯峨中学校は、3小（嵯峨小・嵐山小・広沢小）と1中（嵯峨中）を嵯峨中学校ブロックとして、小中一貫教育を行っています。そこで、「5つの視点」と「5つの実践」の具体として、嵯峨中学校ブロックが連携しながら行っている地域協働を軸とした活動や家庭学習、環境整備などの取組の実際を、画像や映像を織り交ぜながら紹介してくださいました。そのことで、「小中一貫教育を進めるために具体的に何をしますか？」という小滝先生からの問いに対する思考が広がったのではないのでしょうか。全教職員が小中9年間の学びと育ちに責任をもつことの重要性を改めて感じたことと思います。



## 第9回京都市教育学講座 「授業づくりと評価」

講師：学校指導課 海老瀬 隆博 参与



午後からは、学校指導課の海老瀬先生のご講義でした。この社会で私たちがよく聞く言葉である「学校の勉強だけができてダメだと思います。人として大事なことがもっと別にあるのではないですか。」などの問いかけを最初にしてくださった時、皆さんはどう感じたでしょうか。

講義では、新学習指導要領において重視されていることや、教育における「伝統」（変えてはならないこと）と「革新」（変えねばならないこと）の二つの側面を踏まえながら、小学校の図画工作科や音楽科、総合的な学習の時間の授業実践、また幼稚園の保育実践の具体を話してくださいました。教師はすぐに求めている答えを子どもに期待しがちですが、授業の中での子ども一人一人の発言の意味をしっかりと捉え、丁寧に見取ることが大切であることを教えてくださいました。また、よく「指導と評価の一体化」と言いますが、教師自身が自らの授業に対し自問自答すること、授業改善を考える視点をもつことが重要だとおっしゃいました。他にも、「見える事実」をもとに「見えない事実」にせまること、謙虚で柔軟であること、学び続けることなど、『職人』である教師として大切なことをたくさん伝えていただきました。

海老瀬先生が教えてくださいました「授業は教師の魂です。子どもの心に届く確かなかわりは、教師が自らの授業力を鍛えようとする志から生まれます。」という言葉、いつも胸に刻んでおきたいものです。



### 1 全体会

学習する内容を通じて児童・生徒に身に付けさせたい力は何かということを考えることが大切で、そこが明らかにできていないと、ただ遊んで終わりの授業になってしまうことを学んだ。また、問題意識が他の児童・生徒と合わさることで、授業自体がより深いものになっていくので、一人一人の発言を大切に扱い授業に生かしていくことが必要だということも学んだ。指導と評価について、自分の授業のあり方を見つめ直すときに、評価を使うということを知り、やはり振り返りが大切だと感じた。振り返りをしなければ、授業の改善ができないと思うので、児童・生徒に対して行う評価と、それを受けての振り返りはしっかりしていきたいと思った。

### 2 分散会

グループでの話し合いで、授業中での発言を生かせるかどうかは教師の力量にかかっているという意見が出て、間違っている意見でもなぜその答えにいきついたのかという経緯を大切にしたいと思った。そこを明らかにできると、ただ表面に出てきた答えが違ふと否定されるよりも、児童・生徒自身が納得できて次へ進めると思う。さらに、自分の発言に真摯に向き合ってくれるという自信もつくと思うので、経緯を大切にすることを守っていこうと思った。

### 3 まとめ

発言を大切にすることに当たって、経緯まで聞いて考えるには、自分に余裕がないとできないと思う。また、物事を多角的に捉えられる柔軟性を身に付けておく必要があると思うので、そういったところをこれから強化していきたい。そのために、様々なことに興味や関心を持ち、多くの人と関わることで、多くの視点を得たいと思う。

なぜ「指導と評価の一体化」が大切なのでしょう。例えば、この子どもを何としても理解できるようにさせたいのであれば、そのための支援や指導があるはず。そして、そのための授業展開を考えます。そうした意図の下で構築された授業では、子どもが授業のどの場面で何ができればよいのか、また工夫した支援や指導がそれで良かったのかどうかという評価が求められます。なぜなら、今後の指導の工夫や改善につなげないといけないからです。そこにつながらなければ評価であるとは言えません。自分（教師）が子どものためにこのように指導したというなら、その結果を問うための評価が必要になるのは当然のことだと思います。

## FW「先輩の授業に学ぼう」

加茂川中学校 (2/22)



担任が進める  
道徳の時間を  
参観しました。

様々な質問にも  
丁寧に答えてい  
ただきました。

葵小学校 (2/27)



国語科におけ  
る、グループで  
決めた疑問を  
解決していく  
話し合い活動を  
参観しました。

